

つながる柿

VOL.13

ずっと、ずーっとおいしい。



数えやしまへんわ

10/11 Fri.
千安農園 大枝の富有柿 @洛西

京都・洛西の住宅地のはずれ。山々の緑が端から少しずつ秋色に染まりはじめた10月半ば、細く流れる川のすぐそばの斜面には、まるで絵本の世界のように美しくねった柿の木が立ち並んでいます。

これって何本あるんですか？と、見渡す限り続く柿の木に圧倒されて思わず質問すると、78歳とは思えぬほどしゃんとした足取りで柿畑を歩きながら、照男さんは笑ってかぶりを振りました。

「何本やろ。数えやしまへんわ」



「京都では、柿ゆうたら大枝(おおえ)です。山から良い風が吹きおりてきて、寒暖差もある。この畑も100年以上は続いてますね」そう話してくれたのはこれからの千安農園を背負っていく、英雄さん。柿のようにやさしく穏やかなおふたりで、収穫に忙しい秋冬はご近所のパートさんの手も借りながら、雨の日も風の日も休みなく農園の世話をしています。

大枝の柿

「おいしさっちゅうんは、測られへん。世間では糖度糖度と言われてるけども、それは数字だけやね。うちこの柿の特徴は、食べた後も口の中に甘味がずーっと残る。大枝の粘土質の土が、うまい柿をつくってくれるさけね。よそには絶対負けへん。先祖からの贈りものや」

照男さんが穏やかな口調のままで口にしたその言葉に、私たちは言葉を失いました。

ちょっとやさっとじゃびくともしないくらいに強く根を張った木。山から続く、水はけの良い斜面。吹きおろしの風。柿にとって最良の条件がここに揃い、大枝の柿はたわわに実ります。



「昔は人口も多かったし、秋のおやつゆうたら柿かみかんしかなかったさけね、ちっちゃい柿もぜんぶ売れてんけどな」

「柿はいちばんええねんけどな。柿食べてたらずーっと風邪もひかへんし」

長生きして、元気で、柿の世話しなあかん。夢は長生きすることだけや。そう笑う照男さんの姿が今も心に焼き付いています。

自然と向き合いながら仕事をする人の言葉には強い力が宿っています。私たちはできるだけそのときそのままの言葉で、農家さんたちの人柄や想いをお客様に届けられたらと思います。

まるごと、がぶり

慣れた手つきでするすると皮を剥く英雄さんの大きな手。その中の柿があまりに美しくて、つい見入ってしまいました。皮よりもワントーン明るい果実が顔を出し、たっぷりの水分をたたえながら太陽の光をやわらかく受け止めています。少し冷たい柿まるごとを手ひらでつかんで、大きく口を開けて、かぶりつく！



照男さんが「味が続く」と言っていたことの意味を、このとき私たちは全身で感じました。まあいい甘さがからだじゅうに染み渡って、飲み込んだあとも風味や香りが不思議と口の中に感じ良く残ります。どうして味が続くんだろう。なんとかこの味を伝えたくて顔を上げて目を見合わせていると、照男さんがうれしそうに「ずーっとおいしいやろ」と目じりに皺を寄せて笑っていて、なんだかとても幸せな気持ちになって、またひとつ柿にかぶりつきました。

柿って不思議です。その味や食感や色は、ほかの何にも例えられません。柿は外国では「神様の食べ物」、「KAKI」と呼ばれているんですって。

神様みたいなもんで

おいしいってなんだ、という問いを、私たちは考え続けています。その答えはきっとひとつではなくて、照男さんが言うように、味や糖度だけでは測ることができないもの。英雄さんにとっての「おいしい」は、「仕事仲間とみんなで食べるごはん」だと、うれしそうに微笑んで話してくれました。

「みんなで仕事終わりに、にぎやかに食べるごはんがおいしいなと思います。僕らパートさんいないとやっていけないんですよ。神様みたいなもんで、差し入れのジュースなんかも安いもんですね」

取材中、柿畑の真ん中に突然現れた青いハンモック。これは英雄さんがパートさんたちに「欲しい!」とお願いされて叶えたもの。こんなエピソードも、千安農園の柿がおいしい理由のひとつですね。



いち
つな^るる^る市

作業場

収穫した柿を選別する作業場には、照男さんと英雄さん、そして従業員の皆さんの毎日がいたるところに息づいていました。走り書きのメモ、夏の麦藁帽子、収穫のためのかご、かつて使っていたはかり。どこか心が安らぐような、心地よい空気が漂っていました。

収穫の最盛期は1日で青いコンテナ70台分を選別します。年季の入った機械が重さ別に柿を仕分けてくれますが、大きな傷がないか、やわらかくなりすぎていないかなどは、照男さんたちがひとつずつ手に取って確認。そのすがたは職人のようで、繰り返し繰り返し続けてきたものだというを実感し、柿がどんどん積みあがっていくさまを息を飲んで見つめました。

おいしいってなんだ

どうして大枝の柿は、食べたあとも味が続くんだろう。

みんなで一緒に柿をほおばりながら照男さんと英雄さんのお話を聞いたとき、ふと思うことがありました。柿はだんだん色づいていく最中でしたが、あの柿を甘く育てているのは全部、この大枝の豊かな土地とお二人の謙虚なお人柄ではないでしょうか。

照男さんも英雄さんも少しはにかんだようなあたたかな笑顔が印象的でした。それはまるで大枝の富有柿のように、私たちの心にじんと今も残っています。

過ごす場所で人は変わるのでしょうか。食べるもので人は変わるのでしょうか。もしそうであるならば、私たちはこの世界のことをもっと知りたい。これからも産地を訪ねていきたいと、強く思うのでした。

手のひらの柿はずっしり重く、二人の笑顔はいつそう穏やかで、心が包まれていくようでした。



撮影：平野 愛 (写真家) <http://photoandcolors.jp>

住まい・暮らし・人の撮影から執筆まで行う。自然光とフィルム写真にこだわったフォトカンパニー「写真と色々」代表。

編集後記

帰り道にいただいた自家製はちみつ。柿の蜜からできたスペシャル。毎朝ひとさじ食べるのが楽しみになっています。(AH)／果樹園でミツバチを襲うスズメバチと闘うお父さんの勇姿が忘れられない。カッコいい！(MH)／お二人の第一印象「柿みたいですな」。穏やかで優しく、日に焼けて笑顔で。(KO)／お話しているだけで、働く仲間やそのご家族まで大切にされていることがとても伝わってくる英雄さん。大枝の柿が大好きになりました。(KT)／柿の話をする度に柔らかな派か、硬め派か確認してしまう。わたしはどちらも大好きです。(SH)／みんなと畑で柿をほおばったことが忘れられません。食べることでつながっているんだと気づいた瞬間。(NM)

2019.11.1 取材・テキスト・デザイン
無印良品 イオンモール堺北花田
無印良品 京都山科 共同発行

無印良品